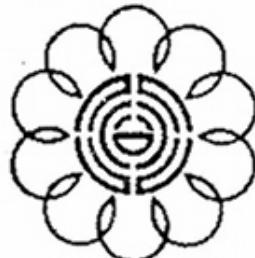


平成 4 年度
第 2 回 越谷市民文化祭
平成 4 年 11 月 20 日（金）～23 日（月）
越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

◇周りの 10 個の輪は、昭和 29 年
11 月 3 日に合併した二町八ヶ村
(「越谷町」の誕生) をあらわす。
なお市に昇格したのが昭和 33 年
11 月 3 日。

ちようそん こし がゆ まち おおきわまさき さくろいむら にいがたむら ましばやしむら おおがくろむら おさしまむら で わ むら がもう むら おゆきがみ むら
10 町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・萩島村・出羽村・蒲生村・大相模村



◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を 4 個集めたもの。
つまり、コ 4 (越) を意味する。
◇中心部のデザインは『谷』の文字
を図案化したものである。

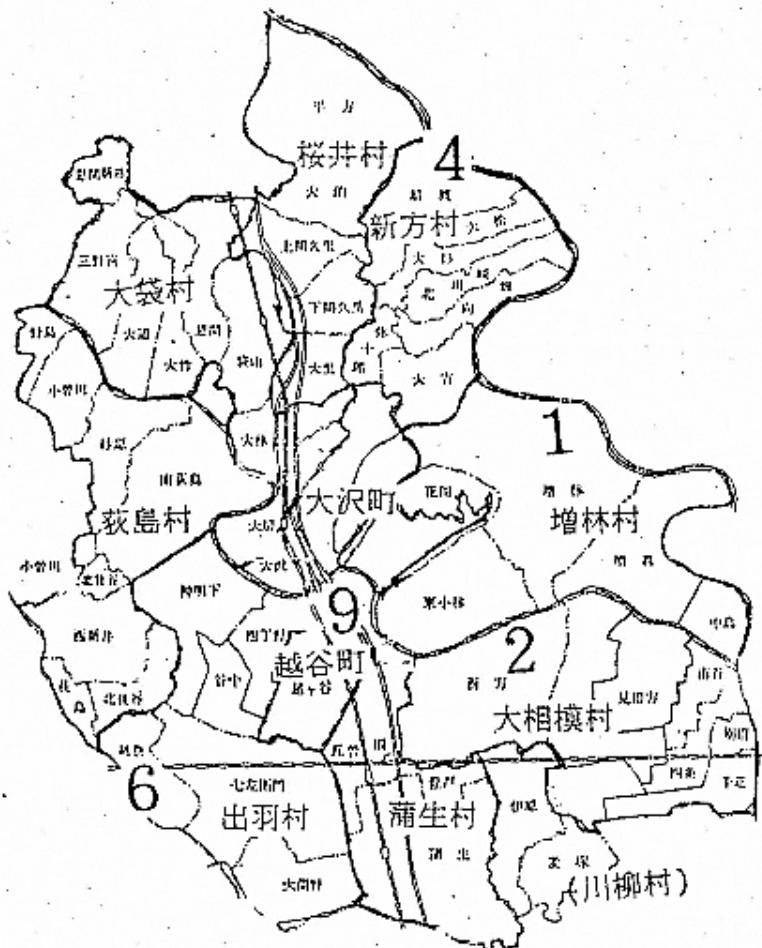
越谷市郷土研究会の案内

- ・昭和 40 年 3 月に発足
 - ・年間 3 回の『研究発表会』、年間 8 回の『史跡めぐり』を実施
 - ・「古文書クラブ」の学習会、「市民まつり」への参加等の活動を実施
- 会員を募集中！（詳細は裏面をご覧ください）

市民文化祭の展示作品リスト

番号	題名	出品者名	住所
1	増林の地蔵等	小原勘三郎	富本町三丁目
2	旧西方村に散在する庚申塔めぐり	加藤幸一	春日都市大枝
3	越谷にある三角点と水準点	小島誠	平方
4	船渡の不動院	鈴木秀俊	宮本町二丁目
5	「オビシャ」語源の検証	高橋清	新川町一丁目
6	越巻学校の跡	名倉さわ	千間台西二丁目
7	元荒川の源流	吉田進	蒲生西町一丁目
8	明治十五年の東京區分全圖	吉田留吉	蒲生町一丁目
9	中町浅間神社の御手洗石	善司敏子	新川町一丁目
10	古文書『入置申一札之事』	袋山	新川町一丁目

市内旧二町八ヶ村（十町村）及び旧大字の略地図



※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、

越谷市郷土研究会の谷岡隆夫（当会幹事長）まで☎621-7527

(1)

増林の地蔵尊

小原 勘三郎

古利根川沿いの増林・
上組地区。



石造の地蔵尊で一八四九（嘉永二）年に地区の念佛講によって建立された。高さ二・四㍍。

市内にある一九四基の地蔵の一つである。大地の恵みを神格化した菩薩が地蔵菩薩である。誕迦入滅から弥勒仏出生までの五六億七〇〇〇万年の間に、衆生濟度をうけもつ菩薩として、奈良時代から信仰されたが、もとはインドの神であつたのが仏教にはいったのであろう。

末法思想のさかんだつた平安中期以降、地蔵信仰はとくに広まつた。

江戸期には延命・子育・身代り・とげぬき・抱瘡・いぼ地蔵などの現世利益を与える存在ともなつた。

また、とくに幼児の救済者とも考えられ、水子供養・賽の河原の地蔵ともなつた。赤いよだれかけをする地蔵が多いのはそのためである。

上組のこの場所は、溺死者・疫病死者の火葬場の跡ともいわれている。市内には、かつて女性の講の発達がいちじるしく、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念佛講と、女性のみの年令階層による講が多かつた。

女講中（写真）とあるのは、定かでないが、林泉寺に今も続く女性の念佛講（お姫講ともいう）とつながりがあるのかも知れない。

(2)

旧西方村に散在する庚申塔めぐり

加藤幸一

1. 庚申塔とは何か

人間の体の中に潜んでいる戸と言われる三匹の戸虫が、六十日に一度やつてくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪つたり、若死にさせたりする。それゆえ庚申の日の夜は戸虫が身体から抜け出る機会を与えないよう寝てはならないという。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす『庚申待』という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔である。江戸時代に全国津々浦々で庶民の間で盛んに行われた。

2. 庚申塔の主な形式

寛文年間（一六六一～一六七二）頃から庚申塔の建立が目立ち始めると同時に、青面金剛と呼ばれる仏様を描いた庚申塔がよく見られるようになってくる。そして元禄年間（一六八八～一七〇三）の頃になると、庚申塔建立の大ブームとなり、この頃、『日月・青面金剛・二鶴・三猿』の型式が完成する。つまり、中央に青面金剛像、上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿が刻まれ、中には青面金剛の両側下に二鶴が刻まれていることもある。庚申様と言うと青面金剛を一般に指すようになるのもこの頃である。

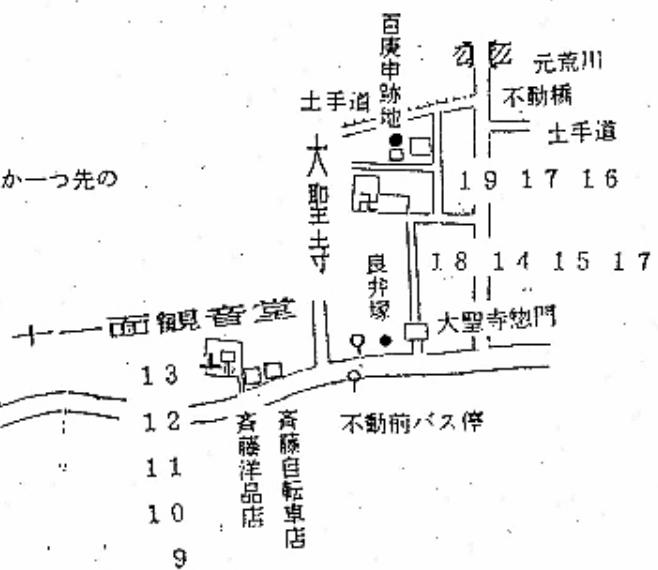
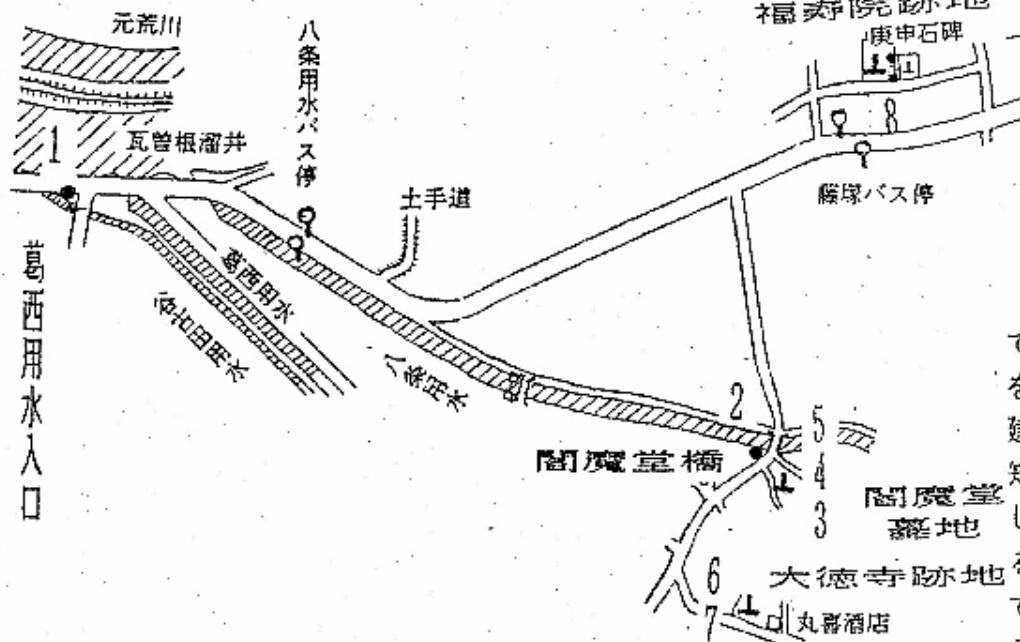
青面金剛は怒りを込めた顔付きで、腕が六本もあって、そのうち四本の手には左右に弓と矢、輪宝（車輪の形をして八方に矛先がでたもの）と矛を持ち、中央の二本の手は合掌したり、右手に剣、左に綬索（一種の綱）を持っている。中には綬索の代わりに女性の髪をつかまえて、その女性をぶら下げているものもある。

江戸時代後半になると青面金剛像を描いた庚申塔の他に『庚申』とか『庚申塔』『青面金剛』という文字のみしか刻まない文字庚申塔も見られるようになる。後にはN.O. 17のような文字庚申塔を百基並べた百庚申信仰も出てくるのである。なお、N.O. 8の庚申塔の近くに、題字が『青面金剛上師十輪願定朝之御作』と刻まれた青面金剛のご利益を記した石碑がある。必見に値するので紹介する。

旧西方村地区（一部）

旧西方村地区に散在する庚申塔めぐりコース

越谷駅（3番のバス停にて吉川車庫か吉川ネオポリス行きバスに乗車）→ 藤田病院前バス停か一つ先の八条用水バス停下車→ 葛西用水口→ 閻魔堂橋→ 閻魔堂墓地→ 大徳寺跡地→ 福寿院跡地→ 十一面観音堂→ 大聖寺（不動尊）→ 不動前バス停乗車（越谷駅行き）→ 越谷駅



ここにあげた地図には旧西方村地区に限っての庚申塔を要領よく見学するためのコースを示したものである。最後の見学地の大聖寺建物内には展示室があり、大聖寺等の歴史を知る上にはよい機会であるので見学をお薦めしたい。また、西方村地区内の庚申塔に関する詳細を記した資料を置いておくのであわせてご覧願いたい。入室・見学料金は無料である。玄関で呼び鈴を押し、展示室の見学を申し出れば見学ができる。

萬西用水取入口

約十兩

文政八年
一七九五

大德寺

約十兩

嘉慶九年
一七九八

亥庚申謹中

享保
外年

十月

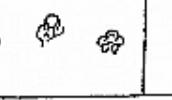
金身
三尊
佛像

簡廣堂橘

約十兩

文政七年
一八一四

青面金剛



簡廣堂墓塔

約十兩

嘉慶十七年
一八二二



4

約十兩

明和七年
一七九〇



5

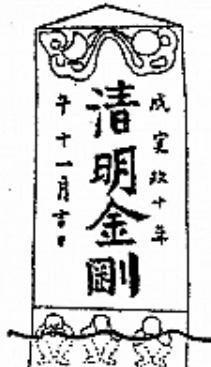
約十兩
正月九日
一七九〇



10

約十兩

庚申塔



9

約十兩

十一面觀音堂

嘉慶十九年
一七九四



8

約十兩

福善院

嘉慶十九年
一七九四



7

約十兩

嘉慶十九年
一七九四



6

約十兩

嘉慶九年
一七九八

図録 1 道しるべを兼ねた文字庚申塔（『庚申講中』）

向かって右側面には「これより上ちおんじ三里はん」、左側面には「たび人の道しるべともかな しるし石」と「もちはくちせぬのりの かよいち」が刻まれている。また、裏面には「これより左吉川至里大きがみ門」と「これより右市井川まで五里」が刻まれている。このような道しるべを兼ねた庚申塔は元禄年間頃から出てくるのである。上部にある梵字のウンは背面金剛を表す。

図録 2 文字庚申塔（『背面金剛』）

「庚申塔」とか「背面金剛」と簡単に文字で刻まれた文字庚申塔は江戸後期に多く見られるようになるが、これもその例にもれない。

なお、この庚申塔は慈恩寺・越谷、不動尊、草加・江戸への道しるべも兼ねている。

図録 3

造立者がすべて女性だけという庚申塔は全国的に見ると珍しい。図録8と図録11も同じである。

図録 6

三種の見鏡が持つ扇子に描かれている日の丸の部分に朱色が塗られているのがわかる。この庚申塔を奉納した秋山家は西方村の山野組の世襲名主を勤めた家柄で、その後も明治初期に戸長などを勤めた。

なお、大徳寺は今は墓地が見られるのみであるが、西方村の山野集落の人々にとって心のより所となっていた寺院である。

図録 8

この年の二月に江戸で行人坂の迷惑（明和九）大火があった。この塔を建てた女性達も大火のうわさを耳にしていたことであろう。

庚申（信仰）に関する石碑

天保九年（一八三八）に建立した背面金剛の御利益を記した石碑である。一から始まって十まで紹介されている。必見に値する。この石碑を建立した秋山は大聖寺境内の惣門西側にある「良井塚」の碑も独立している。

図録 9 文字庚申塔（『清明金剛』）

「背面金剛」と刻むべきを、清く明るいという意味の『清明金剛』としているのは珍しい。風変わりな文字庚申塔といえる。

図録 10 4

造立者のうち、「平内」は西方村名主（現、相模町六一・二五六の須賀家）であり、「東光院」（現、日枝神社東隣一帯の空き地、相模町六一・四九一の浜野家）は西方村の鎮守である山王社（現、日枝神社）の別当寺、「智性院」（相模町六一・四六三の石垣家の屋号は「知性院」なので、このあたりと推定）は大聖寺が支配する寺で門徒と呼ばれた。

図録 11 6 初期の庚申塔

この庚申塔は板碑型である。この型は江戸初期によく見られる。中央には庚申塔には付き物の三種が刻まれている。信仰の仲間組織のことを寛文年間頃までは「結界」と刻まれていたが、この頃から一方では「講中」と刻まれる石塔も見られ始める。この庚申塔はその例である。

図録 12 『百庚申』

百庚申は本堂の裏手の民家が立ち並んだ辺りの小河内家西隣にあった。ここには小山があって、中央には一丈（約3メートル）余りの庚申塔があり、それより左右に本堂に向かって二段ずつ「庚申」と刻まれた文字庚申塔が百基程並べてあったという。現在は昭和二十年代に既に東門に通じる道の両側に並べてられており、九十七基現存している。一丈余りの庚申塔は天保九年に建立されたものであり、平成三年に本堂裏手より現在地に移された。

石塔中央に刻まれている「庚申」の文字に朱色が塗られていたことが、いくつかの庚申塔に朱色の跡がはっきりと残っていることでわかる。

石塔に刻まれた奉納者の村名を見ていくと、武州大相模不動尊（大聖寺）は、広く周辺の村々の間に厚く信仰を蓄めていたことや、大相模不動尊の信仰が江戸にまで知られ、本所・柳橋・横川などからも参詣人があったであろうこともわかる。

一方、増林村の北屋嘉兵衛という人が奉納している庚申塔もあるが、これから増林村は当時は染め物業や晒し業がさかんであったことが裏付けされる。このように庶民の生活等の歴史をつかむうえで多くの鍵を秘めた貴重な資料といえよう。

図録 1 8 『百庚申』

『百庚申供養』との文字が刻まれているこの石塔は、これが建立される三年前に百庚申信仰に基づく百庚申の石塔が奉納されていたが、その百庚申を統括するために建立されたものである。

大分破損されてはいるが、欠けずに残っている輪宝（部分）や鬼の顔がとてもよく描かれ、それに三猿のうち中央の猿は男性の性器が、聞か猿は扇子を持って耳をふきぎ読書をしている姿が描かれるなど細部にわたりよく彫られ、優れた石塔であったと思われる。

なお脇にある『庚申塔青面金剛移転菩薩由緒』の石碑を紹介すると、「……明治二十八年本堂大火災にあい、なおまた大正十二年の関東大震災等に遭い、その破損ははなはだしきものなれど今なおその形像を残している。しかるに今元荒川河川改修施工中その区域外とは言え倒壊寸前状態の当本尊を移設菩薩せしものなり。平成三年六月吉日 国家安寧 人心安寧 当山第四拾世 弘進代」となっている。

図録 1 9

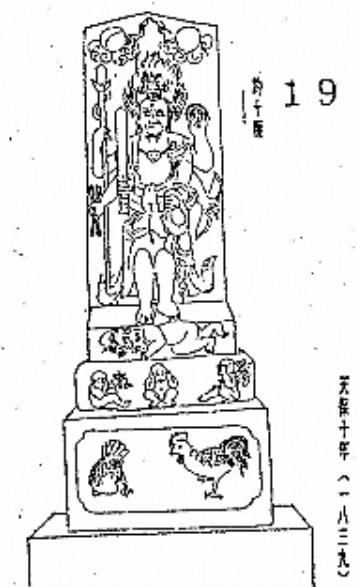
百庚申信仰の『庚申』と刻まれた文字庚申塔（天保六年）や『百庚申供養』と刻まれた百庚申供養塔（天保九年）にのあとに建立された庚申塔である。また、福寿院墓地には青面金剛の御利益を記した石碑『青面金剛上師十善願定朝之御作』（天保九年）も建立されている。この頃が大聖寺にとって庚申信仰の爛熟期といえよう。

図録 1 9 については、細部にわたってよく彫られている石塔なので、詳細を述べたいと思う。

この庚申塔は上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央

の六本の腕を持つ青面金剛は頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸には輪縁の首飾り（般若）がある。また、各手には弓と矢や輪宝・三つ又の矛・剣を持ち、女性の髪の毛を組まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。ただ、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて摩滅しているのが残念である。足下には鬼が踏み潰されている。この鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。山王信仰の影響が如実に現れている。向かって右端は御幣を持つ見猿。御幣は神の代である。この部分が神仏混同となっている。中央の言わ猿は猪が見られ、その下の陰部も表されていて雌猿とわかる。陰部に朱を塗り、下の病を治そうとする信仰のあらわれであろう。今と違って当時の性に対するおおらかさが窺われる。左端は性欲の強い動物とされている狼が女性の臀部を連想させる桃を持つ聞か猿。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下の病の祈願の対象となっていた。二鶴は普通は青面金剛の両脇の下部に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されたり、あるいは全く刻まれていない物も多く見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立して、しかも細部まできちんと描かれている。

以上から私は、この庚申塔は江戸時代の庶民の風俗や信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にも優れ、他には見られそうもない庚申塔であると確信している。



(3)

越谷にある三角点と水準点

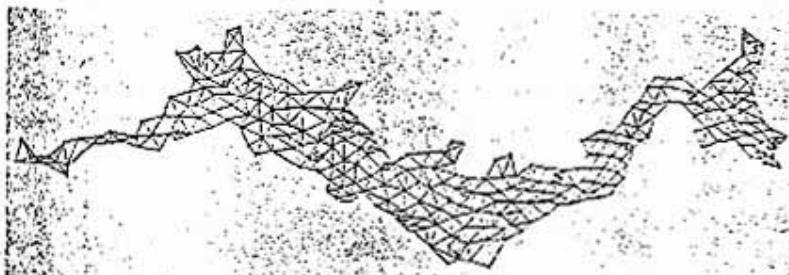
小島 誠

わが国で始めて地図をつくったのは、豊臣秀吉のときで、それを「文禄図」とい、徳川家光の時代のを『正保図』といいます。その後、水戸藩の侍講・長久保赤水が経緯度を用いてつくったといわれる「日本輿地路程全図」がありますが、これらはいずれも実用にはなりませんでした。寛政の御代となり、伊能忠敬が十八ヶ年の歳月をかけてつくった「大日本沿岸実測全図」は、現代でもその正確さに驚嘆するほどです。

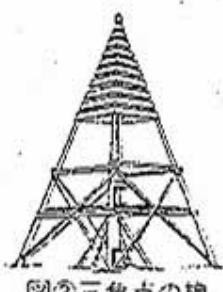
明治の文明は、三角測量の技術の進歩を伴い、精密地図作成を陸地測量部が担当しました。三角測量とは簡単にいえば、日本全国を図①のように三角形で覆い、

その一辺を四五秆とし、頂点に設置した標石を一等三角点、更にその中に一辺が八秆・四秆・二秆の三角形をつくり、その頂点の標石を二等・三等・四等の三角点とし、図②のようなものを設置したのです。

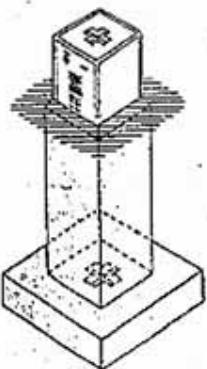
図③は、そのときのA点とB点



図① 1等三角網図（国土地理院提供）

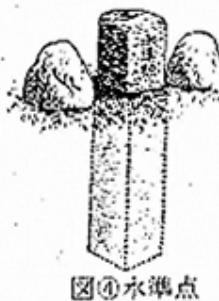


図② 三角点の塔

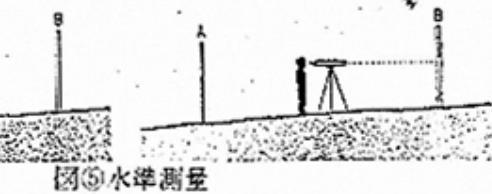


図③ 三角点の標識

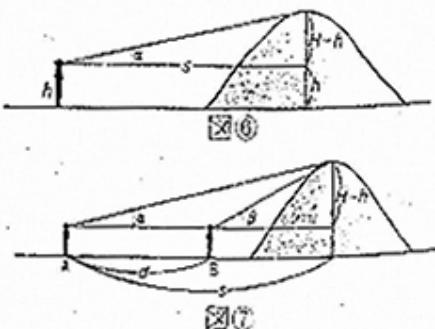
・C点を見通す橋です。これらの位置の原点は東京天文台にあり、北緯三五度三九分十七・五一四八秒、東経一三九度四四分四〇・五〇一〇秒です。越谷では、この四等三角点が登戸・花田・野島・袋山・船渡になります。



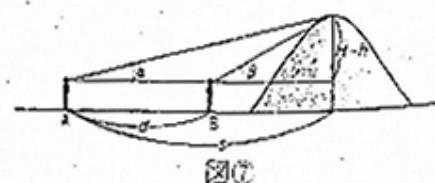
図④水準点



図⑤水準測量



図⑥



図⑦

土地の高さを表す「水準点」の原点は東京三宅坂にあり、東京湾の靈岸島（現在は油壺）で、一八七三（明治六）年から一八七九（明治十二）年まで、海面の上がり下がり

を観測して、その平均値を○とし、原点の高さ

「二四・四一四米」を定めました。ここを基準

として、全国の国道に五万余の「水準点」があ

ると聞いています。その標石は図④です。

その高さの測定方法は、図⑤・⑥・⑦の方法を用いました。この標石が越谷市内では登戸（四・六一米）、越谷（五・九〇米）、大沢（五・六一米）、大里

（六・四二米）にありました。

しかし、現在は生きているのは登戸だけで、他は不明です。

これらについての笑話。

一、関東地方震災地測量（大正十二年九月の地震後）

に神奈川県で三角点が見当たらず、付近を尋ね歩いたところ、付近の老爺が理解不十分のため、これを抜き取り、自宅の納屋に保管していた。

二、別のところでは、自分の畠にこの標石を持ち去り、薙打台に使用していた人がいた。

三、水準点を「水神天」と感違いして、道においては勿体ない罰が当たると自宅に持ち帰り、「水神様」と称して祠におさめ、灯明をともし、賽錢をあげて拝んでいた人もいた。東京府下のこと。

四、越谷で私の体験。

太平洋戦争中、野島の淨山寺を会場に数ヶ村の青年を集めて、十日ほどの宿泊訓練をした。同寺の墓地の隣に一畝步で一米程の高所があり、ある朝、これを敵陣として包囲占領の演習をした。その高所の中央に「十」印の石があり、竹筒二本に花が挿してあった。地元の青年に「この石は何か」と尋ねたら、「この寺に参詣にきて行き倒れた人の墓です」と答えた。

その石の側を掘りしたら、三角点の文字が出てきたので、その意義を説明したことがあった。

(4) 船渡の不動院

鈴木 秀俊

いに新方家は、数多くの伝説が残る新方地区の大字船渡にあり、御当主は新方博氏、家号は不動院と呼ばれる。と在先治青と僧一としして都隅に當家の墓所は、平安時代に作られた古利根川を望む広い墓地には、細川家が新編武蔵風土記をまつて、築城された。墓碑が並び、修驗道の寺院大

と在先治青と僧一としして都隅に當家の墓所は、平安時代に作られた古利根川を望む広い墓地には、細川家が新編武蔵風土記をまつて、築城された。墓碑が並び、修驗道の寺院大

と在先治青と僧一としして都隅に當家の墓所は、平安時代に作られた古利根川を望む広い墓地には、細川家が新編武蔵風土記をまつて、築城された。墓碑が並び、修驗道の寺院大

修驗道

(参考 仏教大事典)

日本古来の山岳信仰が仏教・道教・神道の影響によつて平安時代に作りあげた宗教修驗者・山伏と呼ぶ宗教者。山岳修業と、その結果超自然力に基づく呪術宗教的な活動を中心とする。

天台宗寺門派は醍醐三宝院派の聖護院を本寺とし、真言宗

復活明の本山派は行つていて、令れられました。大戰後

写真① 写真② 写真③ 写真④

最も古い文書、元禄六年（一六九三）補任状。文政三十一年（一八二八年）に之有る。阿院俊政別院の文書で、不動院の院号職事一。香取神社遷宮について、五十五年（一八二九年）に与えられた。僧正法印演隆から大泉

五十五年（一八二九年）に与えられた。僧正法印演隆から大泉

五十五年（一八二九年）に与えられた。僧正法印演隆から大泉

(5) 「オビシャ」 語源の検証

高橋 清

「オビシャ」は村落社会生活に密接した信仰の「講」で、共同飲食を内容とする春祭りである。

部落によつて年番帳のある所と、ない所がある。

年番帳の表記に「お歩射」「産社」「お備社」と異なつてゐる。

この語源を事典より解説してみると次のようである。

お歩射 関東地方東部に行われる春の農村行事。

もとは歩射の神事で、弓を射てその年の豊凶を占つたが、今は單なる村寄合になつてゐるところ所が多い。歩射とは馬に乗らず徒步で弓を射ること。

産社 産着 産毛 産湯 産神など子供の新生に

関係する。つまり「生み出す」を意味し、農作物の新生・豊作を祈願する祭り。

お備社 辞典には備社の單語はない。備と社に分けた。

一、備 そなえ・用意・支度を意味する。

二、社 ①やしろ・神社。

②中國では土地の守護神。また守護神を中心とした二十五戸の部落。

部落の守護神（氏神）を中心とした二十数戸の人々（氏子）が、新年にはいづて農事の支度をし、豊作を祈る祭り。

新川町一丁目稻荷神社「オビシャ」は御備社と書く。
二丁目稻荷神社「オビシャ」は産社と書く。

参考文献 岩波書店「広辞苑」、三省堂「新小辞林」

(6)

越巻学校の跡

名倉 さわ

市内新川町は昭和四十七年十一月、町名変更により、歴史のある越巻の名は消えた。

明治はじめ、越巻村・大間野村が出羽村に合併になった。それまで越巻は一つの独立した村であった。村には稻荷神社と永光山万蔵院があり、古老の話によると村人と和尚の熱意で、明治六年、ささやかな越巻学校が作られた。

越巻の農民の教育への情熱は、他地区の人々よりさんであつたと考えられる。

永光山万蔵院住職の亡き後、明治十四年、子どもたちは観照院の寺子屋に学ぶことになったとか。神社の参道の鳥居を潜ると右手に、学問の神様として受験生に敬われる天満宮の瓦葺の祠がある。

この祠に参拝すると、当地の人々の温もりにひたる。

今の子どもたちは出羽小学校に通い、現代の教育を受けている。

昨今、稻荷神社と万蔵院は蒲生・岩槻県道の拡張によって境内は左右に分離された。

寺の境内は道路になつた。

寺の建替えもあり、学校の跡は定かでない。

住職亡き後、観照院の末寺となり、無住寺となつた。

住職の墓には町の人々の温もりに、香華の絶えることはない。

定かでない学校の跡を後世に伝えたいと念じている。

(7) 元荒川の源流

宮川 進

私達の街・越谷市を流れる元荒川、その源流・水源はどこにあるのでしょうか。

いまから363年前・江戸時代・寛永6(1629)年までは、いまの荒川(水源は甲武信岳)が、この元荒川筋を流れていました。

その年、幕府の代官・伊奈忠治による「懸替」が行なわれ、熊谷市久下でつくられた堤防により、荒川の水は現在の流路を流れるようになりました。

それでは、その後、元荒川には、どういう水が流れようになつたのか。

昭和59年の熊谷市通史編には、「熊谷市の佐谷田雷神社や重箱池等の湧水を水源とするようになった」とあり、昭和52年の荒川総合調査報告書¹では、「久下地先の湧水を集めて…」とあります。

実際に現地・熊谷市久下を訪ねてみて、次のようにことがわかりました。

1 元荒川の水源地付近は現・荒川に近いが、その堤防によってハツキリと仕切られている。

2 いま、元荒川をはじめとしているのは荒川堤防のすぐそばにある埼玉県水産試験場熊谷支場のなかの1つの井戸からくみ上げられた水である。

元荒川の水源はこの井戸といふべきであつた。

(水源は地下で荒川とつながっているのだろうか…)

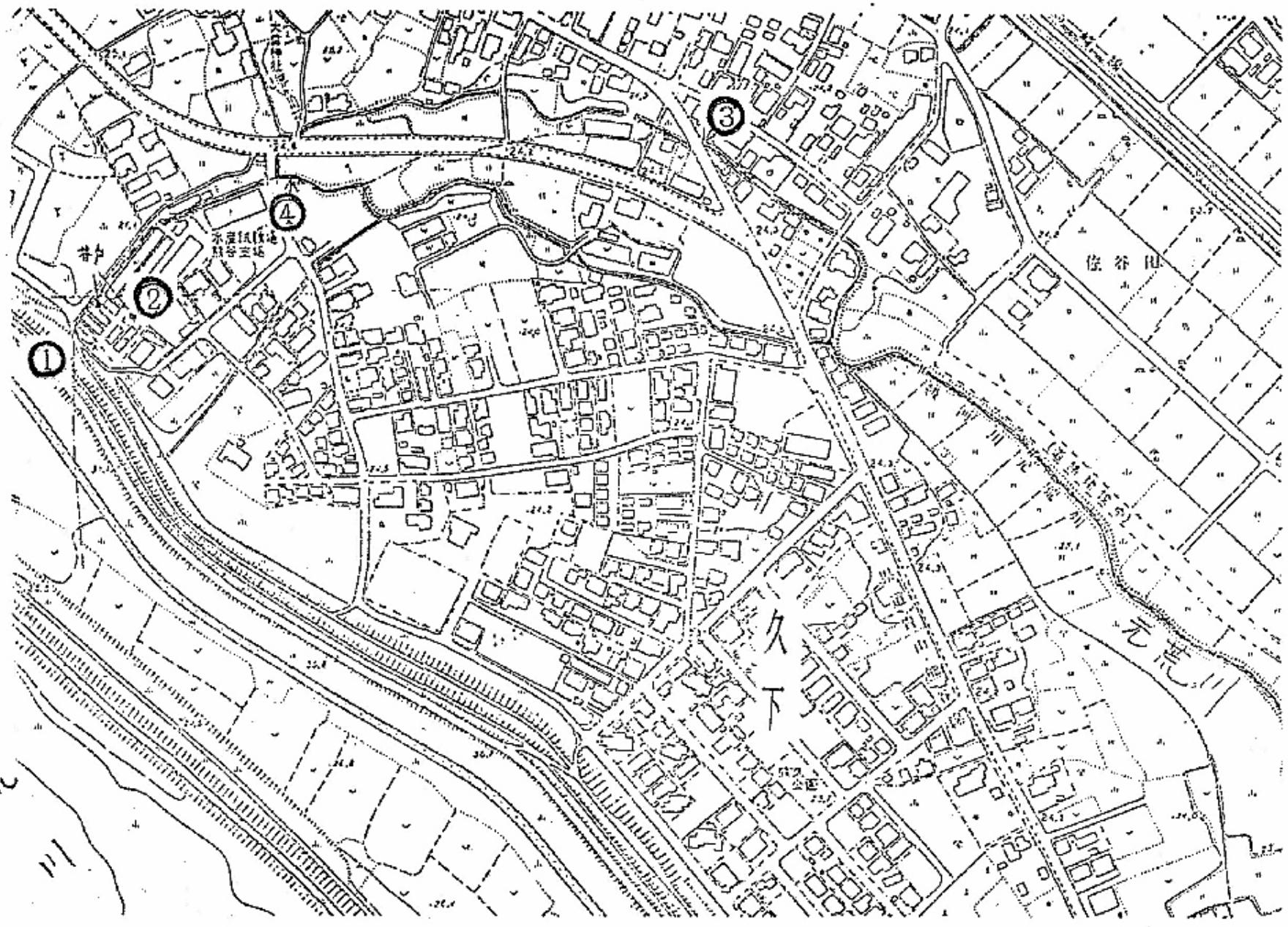
②

3 埼玉県の公式の元荒川起点は水産試験場から約300メートルほど東の橋ノ木一ノ木くらいの小川の中にある。

③

4 この水産試験場は、ヤマメ、ニジマスなどの養成試験をおこなつている。

試験場をでた水は清冽で、天然記念物のムサシムツヨの生育地となつていて^④、ようやく、私達の街・越谷へながれづぎ、中川に合流する。



(8) 明治十五年の東京區分全圖

村田

留吉

明治のはじめ、文明開化が進んでいる。

江戸が色濃く残る中で、新旧が入り混じる東京の風物は、人々に新奇に映った。日本が脱亜入欧をめざして、歐米に追いつこうとしている姿がうかがえる。

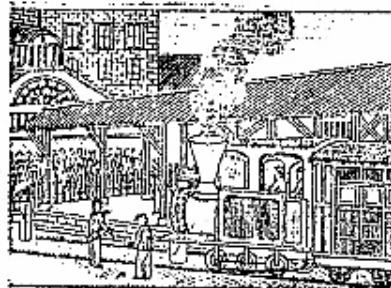
大震災・大空襲を経た現在では、江戸・明治の面影は都内に僅かにしか残っていない。

この地図は戦争中、古雑誌の間から出てきた。

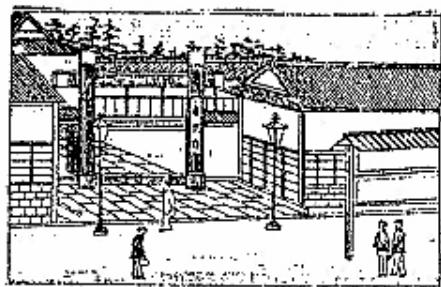
珍しいので保存しておいた。戦時疎開の荷物の中に入っていたものである。



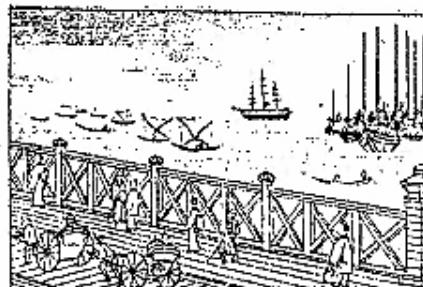
日本橋區之内駿河町三井銀行



芝區之内新橋鐵道察



麹町區之内東京府



日本橋深川兩區之境永代橋

(9) 田中洗石の毎日社の御手洗

三 動 謙 南

元荒川

市津村除地	
土手式之内	伊右衛門持 角兵兵庫
十四畝武足五丈 七間武足五丈	拿子○伊右衛門 中古九郎兵衛屋敷
中古九郎兵衛屋敷	シホ吉兵衛
中古九郎兵衛屋敷	西文次郎
田中勢次吉兵衛	實田屋九郎兵衛
住處馬水落	シホ吉兵衛
	同吉兵衛
	池田中本家 同吉兵衛
御殿下道	同吉兵衛
御殿番相馬中候 近野藏友屋敷	同吉兵衛
御殿堀表通り陣門見通し	

本町	外
名前豆根井 三十三石	五町上 約三十三石
藤左安門同 無姓子	久三三石
	同

葛井村	寺田村	中田村
三三石 寺田村	中田村	
西中田 西中田	西中田	
高井源一又兵兵衛須藤 大野新右衛門 三三石中田	中田 西中田	
中田 中田		
寺田 寺田		

一 之 手 洗

拂手兵	
天岳寺	拂手拂手
天吉兵衛	拂手拂手
天直兵衛	拂手拂手
天時兵衛	拂手拂手
天壽兵衛	拂手拂手
天喜兵衛	拂手拂手
天五郎	拂手拂手
天五郎	拂手拂手
天四郎	拂手拂手
天三郎	拂手拂手
天二郎	拂手拂手
天一郎	拂手拂手
天	拂手拂手

歩行	
川内屋	拂手拂手
下田	拂手拂手
川内屋	拂手拂手

理右衛門風瓶	
高橋	六兵衛
高橋	太兵衛
高橋	又兵衛
会田	八右衛門風瓶
住吉	北名主屋敷
中吉	源兵衛屋敷
四郎兵衛	源治郎
五九郎	内曾右衛門
岳右衛門	夕大忠兵衛
堀右衛門	油長右衛門
中村	堀右衛門
下田	張清吉
堀右衛門	久兵衛
住吉	又兵衛

官文
兵次
御郎

奉平造軍印	
	軍備本部
	奉平造軍印
諸端	口號平十 御定
十五路	
門之兵	
三佐將門	
支長卷門	
御兵	御兵正
五品	
四品	
三佐將門	
諸手早	諸手早
	口號七十八
諸手早	
本兵	本兵
諸手早	諸手早

天音寺	
三佐將門	
支長卷門	
御兵正	
口號三	
三佐將門	
御兵正	
諸手早	諸手早

往還開口道	
禁町	禁町
往還裏水路	
平四郎	市右衛門
戸塚住膳組今來助石街門	
堀四郎	
志家 森田清兵衛 屋敷	旗兵衛
新左衛門 屋敷	旗兵衛
船木 平右衛門	平右衛門
九里 又兵衛	村屋九兵衛組
当新屋敷	久左衛門
小幡市右衛門	中町
	平左衛門
酒市 忠兵衛	利左衛門
源兵衛	忠兵衛
惡水澤	市右衛門
馬上店門	

又兵衛	平兵衛	平兵衛	平兵衛
新井 又長	新井 又長	新井 又長	新井 又長
新町 参行役	新町 参行役	新町 参行役	新町 参行役
新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎
新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎
四脚	四脚	四脚	四脚
又兵衛	平兵衛	平兵衛	平兵衛
新井 又長	新井 又長	新井 又長	新井 又長
新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎
新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎	新井 又五郎

新町
参行役
新井 又五郎
新井 又五郎
新井 又五郎
新井 又五郎

又兵衛	市右衛門	又兵衛	市右衛門
新井 又長	新井 又長	新井 又長	新井 又長
打出し 梅兵衛	打出し 梅兵衛	打出し 梅兵衛	打出し 梅兵衛
次兵衛	次兵衛	次兵衛	次兵衛
又兵衛	又兵衛	又兵衛	又兵衛
新井 又長	新井 又長	新井 又長	新井 又長
六本木堀	六本木堀	六本木堀	六本木堀
忠七	忠七	忠七	忠七
半軒家敷	半軒家敷	半軒家敷	半軒家敷
原 七	原 七	原 七	原 七
横町往来道	横町往来道	横町往来道	横町往来道
木堀 六本	木堀 六本	木堀 六本	木堀 六本
忠七	忠七	忠七	忠七
半軒家敷	半軒家敷	半軒家敷	半軒家敷
本郎八	本郎八	本郎八	本郎八
伊左衛門	伊左衛門	伊左衛門	伊左衛門
富田屋	富田屋	富田屋	富田屋
幸田屋	幸田屋	幸田屋	幸田屋
本郎八	本郎八	本郎八	本郎八

北口門
喜兵衛

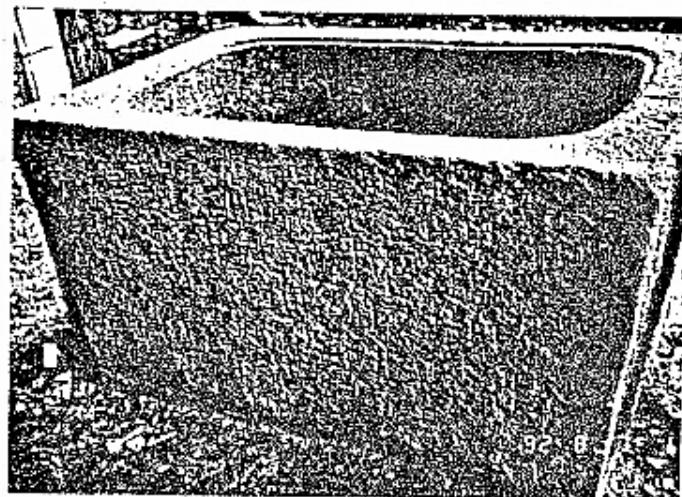
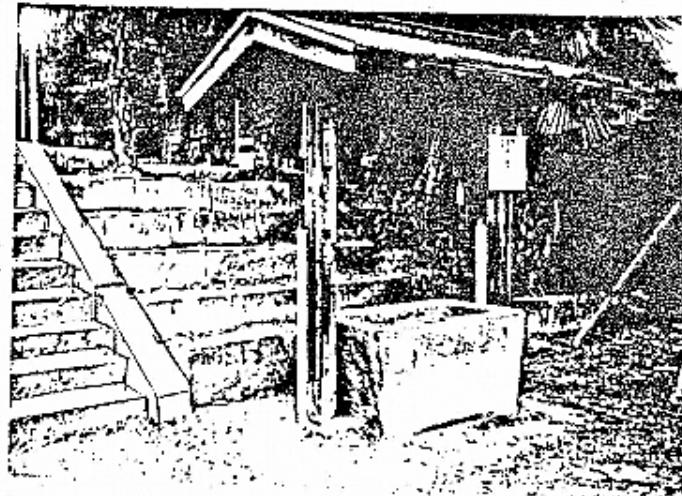
金田
五郎兵衛 大屋敷
回屋

越ヶ谷中町

浅間神社

谷市越ヶ谷中町4674地内

御 手 洗 石



御手洗石・裏面奉納者名

浅間神社・御手洗石

所在地 越谷市越ヶ谷中町 7-26 浅間神社境内

種別 御宝前手洗石

起立年月日 右側 延宝三(一六七五)乙卯年 左側 九月吉日

寸方 高さ70釐 間口110釐 奥行70釐 長方稍錐形

内寸方 間口 87釐 奥行 50釐 角丸長方形

裏面記名 上段

下段

会田重治 浜野源介 山田興兵衛
宇田次郎左衛門 萩原長兵衛
荻野養益 井田彦兵衛
小久右辰之助 田中平衛門
鈴木平衛門 沢野三郎兵衛
皆川午之助 岩瀬彦兵衛
高崎長兵衛 浜野吉兵衛
田中七左衛門 堀場伊之松
崎木孫十郎 木瀬彦兵衛
木吉兵衛 横根忠左衛門
山原廣木 忠左衛門
平田田勘兵衛直勝
遠藤一郎 田勘兵衛直勝
大塚孫兵衛 田勘兵衛直勝
塚久右衛門 田勘兵衛直勝

是の御手洗鉢は、延宝三(一六七五)乙卯年九月吉日の起立にて、越谷市内の御手洗鉢では二番目に古く、然も多数の発起人の氏名が見られ、当時の越ヶ谷宿割を知る上で貴重な資料である。

越ヶ谷領 四町野村

浅間社 社地 周り、四拾間 同断 別當真言宗 迎撫院の持。

右は、四丁野組同寺別當、今、相別れ別村に相成候、

越ヶ谷の歴史散歩

当社は、江戸時代、越ヶ谷中町の鎮守て在りながら、越ヶ谷の隣村四町野村の領分で四町野村真言宗迎撫院の別當社で在った。

明治二十二年の町村合併の際、飛地の交換が行われ、以後、越ヶ谷の領分となる。自後、町内持となる。

註、元来、四町野村の所、日光道中筋と成りたる為に、越ヶ谷宿が出来、二村に別れる事となる、之の時、四町野村の持とし、浅間神社・久伊豆神社が村内として残され、迎撫院の別當社として其の保残されたもので有る。

越ヶ谷瓜の棧

人潤明本陣名手 福井誠貞 記

一、元禄八御検地名所請之百姓、九分通退転仕候得共、只々屋敷之名而已相附、文化九年所持之者記之。

一、御検地名所請候屋敷ハ、他ニ渡り當時外百姓ニ相成候者、其訛荒増記之、又名所之子孫無田地ニ候共、當時住居罷在候者又後記ス。

裏面 発起人

御手洗石に記名の在る者は、二十九家である、御手洗石の奉獻されたのが、延宝三（一六七五）乙卯九月吉日、其の時代の越ヶ谷宿の、主高百姓の現況が推測出来る貴重な資料である。

『越ヶ谷瓜の棧』の刊行は、文化九年（一八一二）以後であるが、「元禄八年（一六九六）御検地名所請之百姓、九分通り退転仕候得共、文化九年所持之者記之」と同書に記されている。

浅間神社の御手洗石に刻まれて居る、延宝三乙卯年（一六七五）当時の百姓は、此の時代既に、九分通り退転して居り、『越ヶ谷瓜の棧』を参照して、推測出来る家は、十三軒程に過ぎず、半數にも満たない始末である。

平成四年の現在、手洗鉢に名前の残る家で、該当する家系は、全て其の枝葉にて四軒程に過ぎない、推測可能なる者を含めて、『越ヶ谷瓜の蔓』記載の記述を充てはめると次の如くなる。

会田 重治

本町三丁目東側、会田八右衛門屋敷、(大野計量屋) 往古北大名主屋敷、後、西大名主浜野藤右衛門と申相勤候處、伴藤五郎不届之儀有之、於六本木獄門に被御付旨、役義御取放有之、八右衛門惣人名主二相成申候、会田八右衛門義、後退転に及仕候。

浜野 源介

本町三丁目西側、浜野藤右衛門屋敷之儀、(鏡電氣) 西大名主退転後半軒宛品々相渡り、當時境尾吉兵衛、三河屋下出源次郎両人に而半軒宛所持罷在候。

浜野藤右衛門棹、酒狂にて相長じ不埒故、跡役難相勤、宝永・正徳之年間元屋敷株田畠質流に相成、江戸表江罷出御奉公相勤罷在候。

乍然御番屋敷跡百姓地に相成候、源助名所半軒株之儀、地守は市兵衛と申者江頭隣同隣藏地へ入候処、右藏藏死後、伴丈太郎名所に相成持伝候得共、天明八年年右半耕之儀、百姓自旦曉情酒口、慟力江質流跡仕候、条所相違無御座候。

宇田 次郎左衛門

不明

荻野 養益

不明

小久江 辰之助

不明

鈴木 平衛門

本町二丁目東側、平衛門儀、(宇田川呉服店) 寛永以後より代々請所持也、年寄も相勤申候旧家也、鈴木党之本家也。

田中 午之助

本町三丁目西側、一、田中吉右衛門屋敷之儀、(鍛冶倉履物・藤城呉服) 宝暦中より富山屋伊左衛門所持仕候。附、田中吉右衛門先祖之儀、元和中河内國より來り、越谷草創之列二入代々年寄役相勤來、田中党之本家也。元禄三町七反其の外多分有之八町余之処、今程半軒外屋敷似龍在候、云々。

一、百姓弥惣右衛門先祖之儀、田中吉右衛門と申、元和以

後、河内國より者、西組年寄り相勤申候家柄ニ面越谷
田中党之本家ニ而出羽・八右衛門・藤左衛門杯と申合
明取立同様之筋目二候。

高崎 長兵衛

本町二丁目西側、高崎伝兵衛屋敷之儀、（鬼屋・四ツ目屋
の間）附、伝兵衛子孫之儀、袋町に当時罷在候、よこれ万
五郎也。

鈴木 孫十郎

本町二丁目西側、一、百姓源右衛門儀、（佐々木乾物店）
中古鈴木平右衛門分地也。

山崎 吉兵衛

本町二丁目東側、山崎良右衛門屋敷之儀、（中村洋品店）
七十年以前退転、其後右地面種々人手に渡り申候、今
程中町麿屋市兵衛半軒、大沢本陣福井権右衛門半軒所
持致候事。

一、伝右衛門屋敷、新町油屋良右衛門、葛餅屋忠兵衛（都
都賀麦屋・中村ガラス店）近來所持致申候、油長之儀
ハ新町住居也、忠兵衛之儀ハ、養父忠兵衛鉤上村より
来箇内ニ而取立、天明以後百姓と成申候。

皆川 七左衛門

不明

平田 三郎兵衛

不明

小菅 一郎左門

不明

大塚 久右衛門

不明

松下 文兵衛

不明

荻原 長兵衛

不明

遠藤 孫兵衛

本町二丁目西側、一、遠藤平左衛門之儀、（関谷酒店）
一株也、乍然遠藤党之本家也、今半株ハ宗續所持也。
候、医師遠藤宗續ハ、元和中落着之者、代々名所も持居申

細野 五兵衛

本町三丁目西側、一、細野五兵衛屋敷六兵衛之儀、（元天
芳・会田屋）先祖三雲平兵衛作、又兵衛・六兵衛・五

兵衛と御入国以来代々所持罷在、御高札場・橋番等勤
來、御伝馬役除來候、宝曆初半軒塙谷吉兵衛へ相渡申
候得共、当組旧家也。

浜野 三郎兵衛 本町二丁目西側、一、四ツ目屋浜野次郎右衛門屋敷之儀、(田間口吉果
一 森田半兵衛中古所持、夫より鍋屋佐兵衛江相渡、
享保年中より佐兵衛弟長左衛門分家也。)

浜野 吉兵衛

本町二丁目西側、一、四ツ目屋浜野次郎右衛門屋敷之儀、
(松本洋品店) 今、小左衛門所持、当平井小左衛門
儀八、享保以後三州より來り居酒屋渡世致し、安永年
中より盛ニ成由候。

重兵衛

本町三丁目西側、一、田中吉右衛門屋敷之儀、(鍛冶倉
(藤城吳服) 宝曆中より富田屋堀伊左衛門所持仕候、掘
党之本家也。

田中吉右衛門屋敷八、富田屋伊左衛門儀、居所之屋敷
ニ而訛ル。

本町三丁目西側、一、百姓富田屋堀伊左衛門は、(現堀屋
都築八郎右衛門と山田屋盛藤家の半分) 元禄年中大
河江止り米取立申候、掘草之本家也。乍然、大室に成
候得共、伊左衛門名所之地而一切無之候。

本町三丁目西側、一、元木下八郎右衛門屋敷、(遠藤山田
屋) 百姓富田屋良右衛門は、安永年中伊左衛門分地
也。

本町三丁目西側、一、同弥次右衛門屋敷、(柳瀬床屋・金
久保茶舗) 九兵衛・シ水吉兵衛所持罷在候、弥次右
衛門之儀、退転仕候。

本町三丁目西側、一、裏株屋敷、(筒屋吳服) 富田屋
兵衛・岡伊左衛門兩人に而半軒宛所持、弥次右衛門
屋伊左衛門分地富田屋五郎兵衛跡也。

附、中町松坂屋九兵衛と申ハ、富田屋伊左衛門分家、今退
転ニ而牛嶋村出生、富田屋勘藏之分家、天明八年之頃
より百姓と相成申候。

本町三丁目東側、一、利右衛門屋敷、(元東電跡) 百姓
富田屋文次郎ハ、富田屋伊左衛門之下人ニ而登戸村出
生、天明年中右之所へ分家、百姓ニ相成、半株八塙吉
所持。

持之。

井田 彦兵衛

不明

馬場 弥兵衛

不明

岩瀬 伊之松

不明

横根 忠左衛門

不明

広木 勘兵衛直勝

不明

会田 権四郎

本町二丁目東側、一、会田權四郎之儀、(池田屋バチンコ
店)寛永年中より代々權四郎所持之旧家也。

姓は、会田と申、会田出羽より拌餌の名字に而有之山
、依之本町市場地割元も致候上、中古年寄も相勤申候
也。市場通料等取米之候、穀屋彦右衛門之本家

以上の如く、「越ヶ谷瓜の蔓」を參照して、其の所在を照合して該当する者を、
記すと以上の如くなるが、其の場所に、居住する者は見当たらず、僅かに其の子孫
、又は、分家等で其の名を繼承する一族が見えるのみである。

その他は、町内には名字を名乗る者も無い始末である。榮枯盛衰は世の習とはい
え、往時の宿場町への賦課の厳しさが窺えるものである。

以上

入れ置き申す一札の事

吉田 敏子

この文書は農間風呂場渡世に付き、入れ置き申す一札の事と云うもので、入れ置き申す一札と云うのは、約束を保証するために相手方に差し出す証文の事である。

資料の内容は、武州葛飾郡平須賀村の百姓武右衛門が農間余業として、風呂屋を開業したいと云う話から始まる。近世封建社会に於いては、農民は農業を專業とするというのが原則である。

しかし近世中期以降、特に幕末頃（この文書は安政四年）になると、農間余業と称して商人や職人になる者が増加し、農民の農業離れが多くなり農村は荒れて来た。そのため貢租の減少をおそれた幕府は、農間渡世取調帳を作成して、それらを統制し防止しようとした。資料によると、百姓武右衛門は病弱になり農業だけではとても生計が成り立たなくなつた。

そこで風呂場渡世を當みたいと考え、組合の迷惑も顧みず、再三幕府に願い上げて、やっとその許可を得る事が出来た。

そこで、武右衛門は勘右衛門を身元引受人に立て、村名主と改革組合中に對して、今後その筋よりお咎めなどあつた場合には、早速店じまいをする事、又何か違変が起きた場合には、あらゆる面で御迷惑はおかげしない事など、受人共々でこの約束証文を入れたのである。

なお、資料にある武州葛飾郡平須賀村は、現在埼玉県幸手市の平須賀である。

入金中紀事

今般秋氣已近暮葉落甚江指事不復年
之弱也農業漸次亦因之而衰亡之處
其寒來早農事用足而後世也更著寒之
中西行者及此終冬其都山中迷霧
中寒甚者半日也大抵是大公之病者
亦固有之但多能自持其寒不為所害
者固有之然其一多被其害者則其病
久不愈者多是也其餘者則其病亦
非難治者也其音節亦可尋其聲韻
之而知其病之深淺其病之輕重亦
可得其音節之而知其病之深淺其病之
輕重則其音節之而知其病之深淺其病之
輕重則其音節之而知其病之深淺其病之

高祖元年

二月

金匱要略

郷土の昔を旅してみませんか

越谷市郷土研究会でのお説明

当会は昭和四〇（一九六〇）年、発足以来、史跡めぐり一九四回、研究発表会一〇六回を重ねてきました。多くの仲間と昔の旅人になってみませんか。

地史跡めぐり

緑のかぜの中を、仲間とともにやまと語りあいながら、先人の遺した文化財を訪ねます。原則として毎月第四日曜日。
夏・冬を除いて年間八回。日帰りのできる関東一円をめぐります。（東海道品川宿・古河・鎌倉など）
越谷駅・南越谷駅で集合・解散です。会員でない方々の参加も大歓迎。広報『こしがや』に予告掲載されます。

地研究発表会

先学の方や会員の日頃の調査・研究を仲間たちに知らせます。
年間三回 第四日曜日の午後。

地会報の発刊

平素の成果や思い出話を集録します。会報『古志賀谷』発刊。

越谷文化連盟

市民まつり十月・市民文化祭十一月に毎年参加しています。
会員の日常の研究を写真・地図などで展示発表します。

地古文書クラブ

祖先たちの日記・紀行文・契約書・訴状・生活のようすなどを、皆で読みます。人々の哀歎が、行間からきこえてきます。
初級といど。毎月第一土曜日・第三土曜日 午後 中央市民会館
地その他
けやき学校歴史散歩教室 老人福祉センター『けやき荘』へ講師派遣。
南越谷公民館へ講師派遣。

入会のおすすめ

祖先たちの生活のようすを知り、文化財を訪ねながら、仲間の輪を広げましょう。入会は電話でも葉書でも結構です。なお当会場でも受付けております。

（会員へは、すべての行事のご案内をさしあげております）

会員費	年間二〇〇〇円	（会報・諸案内状・諸会議費など）
史跡めぐり	その時の費用（交通費・資料代・保険など）	
研究発表会	その時の費用（資料代など）	